

小説を読もう 悩む私たちのカタルシスに

『ケアを描く 育児と介護の現代小説』

佐々木亜紀子、光石亜由美、米村みゆき ● 著 (発売:七月社) 2,000円(税抜き)

日 本文学や日本語教育の研究者が、介護が描かれている小説について論評する。7人の論者が20冊以上の小説を取り上げている。取り上げられている小説家は、角田光代、三浦しをん、辻村深月、小川洋子、楊逸、多和田葉子、鹿島田真希。その小説家が描きたかったことや、そこで表現されているものの意味は何か?と謎解きをしてくれる。好きな人にとっては、興味をそそられるし、小説を読んだことのない人も「読んでみようかな」と手引きになる。

著者らは「ケア小説」という概念を世の中に打ち出したいという。介護や育児をケアという大きな概念でくくり、それが主要に描かれている小説を「ケア小説」と定義。ケアが女性の私的労働として担われてきたというフェミニズムの思想がにじみ、そこから新しい価値観を作り出そうとする。

小説家が描くケアは、私たちが介護と呼ぶものをはるかに超え、人間と人間のつながりや共感、配慮をさまざまに表現する。人間のありよう、家族のありよう、社会のありようがあぶりだされ、私たちの悩みや苦しみを癒してくれる。

